北陸歴史探訪

金沢学院大学 名誉教授
東四柳 史明

第4回 上杉・織田両軍と手取川の合戦

手取川（湊川）の夕陽（石川県白山市）

戦国時代末期の天正５（1577）年９月15日、能登国の大名畠山氏の居城であった七尾城を攻略した越後の上杉謙信は、次いで加賀国へと向い、同月17日、口能登の要衝である畠山方の羽咋郡の末森（末守）城（現羽咋郡宝達志水町）を攻め落とし、占拠した同城に家臣の山浦国清・斎藤朝信を配置して、能登と加賀国境を押えた。

その後、前年５月の本願寺と上杉謙信の和睦によって、上杉軍の支援を期待した加賀一向一揆勢も加わり、謙信は南から加賀に攻め入った織田信長軍を迎撃するため、加賀一向一揆の旗本鏑木頼信の居城である石川郡の松任城（現白山市古城町）に入った。

またこれに先立つ同年８月には、謙信は既に織田方の加賀進攻に備え、一向一揆の拠点金沢御堂の七里頼周（本願寺内衆）に、能美郡御幸塚城（現小松市今江町）を堅固にして、織田軍に対峙する一揆衆の結束を求めている。

織田軍の加賀進攻

ところで織田軍の加賀への進攻は、当時上杉軍に包囲されていた能登の七尾城に拠り、予てより好みを通じていた長続連一族からの救援要請を受けてのものであった。近江安土城で、七尾城からの使者孝恩寺宗顒（続連の三男）※1に、至急同城への救援を懇願された織田信長は、同年閏７月、越前府中城主の前田利家に、翌８月８日に七尾城救援のため、織田軍を能登に向けて加賀へ出馬させる旨を伝えている。

そこで８日になると、越前の大名柴田勝家を大将に、利家・佐々成政・不破光治の越前府中三人衆や、惟住（丹羽）長秀・滝川一益・羽柴秀吉等の織田方部将が、加賀に向かって出陣を開始したのであった。

織田軍は、その後能美郡の小松・本折・安宅（現小松市内）の所々を焼き払い、先陣は、湊川（現手取川の本流）を越えて、９月10日に、浜手から石川郡の宮腰（現金沢市金石町）に進んだ。しかし折からの悪天候に阻まれ、急遽同郡の松任城の際を通って、山手の道に向かうも果たせず、松任城を包囲はしたものの、上杉方の援軍を得た一揆勢と戦って敗北し、いったん湊川付近まで退いていた模様である。

また翌11日には、宮腰川（現犀川）の川辺に赴き、渡河の可能性

「上杉謙信像」米沢市上杉博物館蔵

※１　畠山の重臣長一族のなかで唯一生き残り、還俗の後、名を長連龍（ちょうつらたつ）と改める。天正８（1580）年、織田信長から能登の鹿島半郡を領地として与えられ、翌９年に前田利家が能登の国持大名になると、その与力として利家を支えた。子孫は後に前田家の重臣（年寄、加賀八家）となり、33000石を知行した。

を探るつもりであるが、昨日来の雨により、水嵩が増しているため、一両日進軍を延期せざる得ないとしている。次いで同月18日、未だ七尾城の陥落を知らない織田軍の本隊数万騎は、この日湊川を渡河し、石川郡水島（現白山市水島町）に陣を布いた。

七尾落城と織田軍の撤退

その頃、加賀に在陣する織田軍の許には七尾城よりの連絡が全く途絶え、不信に思っていたところ、末森城からの飛脚によって、能登国の百姓のほとんどが上杉方に投降し、末森から七尾城までの通路も閉ざされているとの報に接した。このため柴田勝家等の織田方部将が協議した結果、これ以上の織田軍の増員派兵を、当分見合わせるよう、安土の堀秀政を通して信長に伝えている。

『長家家譜』によれば、９月15日に、大名畠山氏の重臣遊佐続光※2の内応によって、七尾城を陥落させた上杉謙信は、急遽能登から加賀の松任城に進駐し、織田方に七尾落城を知らしめるため、討ち取った長氏一族の首級を、石川郡倉部（現白山市倉部町）の浜に晒したとされている。

これを知った織田方が、孝恩寺宗顒にその実否を確認させたところ、宗顒はその首級は偽物だとし、落城は上杉方の妄説によるものと否定した。しかしその夜、宗顒は密かに羽柴秀吉の陣に赴き、諸将の士気が失われるのを恐れて嘘をついたことを詫び、晒し首は自らの父兄や一族のものに間違いないと告白する。

この結果、救援に向かうべき七尾城が落城した上は、織田軍の進攻は無意味となり、柴田勝家らは加賀から撤兵することを決した。これに対し宗顒は、なおも進攻を続け、父兄の仇敵を討つことを懇願したが、退けられたとされている。

９月23日の夜襲

七尾落城を確認した織田軍は、９月23日の夜中に、夜陰に乗じて密かに湊川を渡って、一斉に南加賀の能美郡に撤退を開始した。

機を逃さず、この動きを察知した謙信は、すかさず追撃戦に出る。一里半程離れた松任城から、一路南の水島に軍を進め、織田軍を背後から急襲したのである。そのため織田勢は、不意を衝かれて敗北し、軍兵1000余人が討ち取られた。湊川は折からの雨で増水していたため、多くの人馬が濁流に押し流されたのであった。

謙信は、湊川の夜戦の勝利を確かめると、湊川を渡河して南加賀に遁走する織田軍を追撃せず、湊川から能登に再び取って返し、七尾落城後の戦後処理と、能登の領国支配に着手した。

その結果、能美・江沼の南加賀両郡は、引き続き織田方の支配下に置かれ、大将柴田勝家は、御幸塚城に甥の佐久間盛政を、江沼郡の大聖寺城（現加賀市大聖寺錦城山）に勝家の手勢をそれぞれ配置し、その城普請を申し付けて越前国北庄（現福井市内）の居城に帰った。ここに織田信長は、手取川（湊川）の合戦で敗北したものの、北陸において、越前から南加賀に政治勢力を拡大することになる。

後世、この合戦を風刺して、「上杉に逢うては織田も手取川、はねる謙信逃ぐるとぶ長（信長）」の狂歌が詠まれた。謙信は合戦時に、織田軍の大将に信長がいたものと思っていたらしく、信長のことを越後の一族に、「案外ニ手弱之様体」と報じているが、信長はこのとき参陣してはいなかった。こうして謙信が織田軍と雌雄を決すべき覚悟で臨んだ上杉方と織田方の最初にして最後の合戦は、謙信大勝利のうちに幕を閉じたのであった。

手取川古戦場の地にある狂歌が記された石碑

上杉軍（上杉謙信）と織田軍（柴田勝家）の進路

※２　能登の守護代の家筋で、能登畠山氏の重臣、畠山七人衆の一人。主君畠山義続・義綱父子を追放し、義綱の子を傀儡として擁立した。やがて親織田派の長続連が七尾城内で台頭すると、同城を包囲した上杉謙信に内応し、畠山氏を滅亡、長一族も悉く殺害し、謙信から能登支配を委ねられた。天正６（1578）年謙信没後、織田勢が能登に進攻すると、身の危険を感じて逐電したが、長一族殺害の罪を問われて捕えられ、処刑された。